

## 【追悼】

# 追悼 有田正三博士

足利末男\*

本学会の前身「経済統計研究会」設立発起人で運営委員であった滋賀大学名誉教授有田正三博士は、平成16年（2004）年1月28日胆管癌のため逝去された。享年89。教授は、著書2、翻訳書1、論文53（うち英文1）、その他5編を残された。その大きな学問上の功績をしのび、心からご冥福を祈る。

### 1. 年譜

大正3年11月15日 有田宗一・カツの長男として神戸市で生まれる  
昭和6年3月 京都府立第二中学校4年終了  
昭和9年3月 第6高等学校文科卒業  
昭和9年4月 京都帝国大学経済学部入学  
昭和12年3月 京都帝国大学経済学部学士試験合格  
昭和12年4月 京都帝国大学大学院（経済学部）入学。財部静冶教授、特に蜷川虎三教授指導のもとに経済統計論の研究に入る  
昭和15年10月 同上退学  
昭和15年11月 京都帝国大学助手  
昭和20年9月 依願免京都帝国大学助手、京都帝国大学経済学部講師嘱託  
昭和22年11月 戦争責任を反省し、その責任を取る為、白杉庄一郎助教授とともに京都帝国大学辞職  
同年 同月 彦根経済専門学校教授  
昭和24年6月 滋賀大学助教授  
昭和34年9月 滋賀大学教授  
昭和38年3月 論文「ドイツ社会統計学研究」で京都大学より経済学博士の学位を授与

\* 京都大学名誉教授

される

昭和55年4月1日 定年により滋賀大学退職、名誉教授

昭和56年10月 私立神戸女子大学教授（昭和60年3月まで）

昭和58年4月 私立大阪経済法科大学客員教授（平成7年3月まで）

平成16年1月28日死亡

栄誉 昭和62年11月3日 勲3等旭日中授章  
平成16年1月28日 正4位

### 2. チチェックの研究

有田教授の研究は、指導教授蜷川博士に与えられた「ドイツ統計学におけるチチェックの地位」であった。チチェック（1876-1938）は、オーストリアのグラーツ大学に法律を学び、1898年法学博士になり、1903年ウィーンの中央統計委員会にはいった。次いで、商務省に転じ、主として労働統計に従事した。注目すべきは、この間にロンドンで、ポウレイの統計学を聴講した事である。1908年の“統計的代表値論”によってウィーン大学で教授資格を取得し、1916年、新設後まもないフランクフルト・アム・マイン大学の統計学教授に招聘された。当時ドイツでは、この大学を含めて統計学の講座を持つのは4大学のみであった。この招聘は、フランクフルト大学の卓見であった。チチェックは、1922年に公開した『統計学綱要』で、ドイツ統計学会で揺るぎない地位を占めた。有田教授のドイツ社会統計学の研究はチチェックに始まり、チチェックで終わるといってよい。亡くなるまでの私との対話では、“チチェックの法則論”を論文に纏めたいと絶えず話されていたが未完に終わった。残念である。

有田教授は、20世紀にはいって、ドイツ社会統計学の学問的性質の実体的科学から形式的科学への転換を、他の学問に類を見ないことであるとし、その契機を方法論的分野に於ける従前の統計作成者の観点から、統計利用者の観点への移行にあるとする。教授は、チチェックを実質科学の痕跡を留めつつ、統計利用者の観点にたつ方法論体系を示したとする。教授は、この事態の本質の解明のため、ドイツ社会統計学の歴史的研究に進む。教授は、19世紀後半に形成された実体科学説成立までをドイツ社会統計学の前期、1920年代に始まる方法論的科学説の成立から現代までを後期とする。

### 3. マイヤとリューメリン

実体科学としての社会統計学の19世紀後半の成立の根拠を、諸邦に分かれたドイツが、関税同盟からドイツ帝国の成立にいたるまで統一的な社会数量像の形成を統計学の学問的課題としたことにあるとし、その完成者をゲオルク・フォン・マイヤ（1841-1925）とする。そして彼の統計理論を分析する。勿論それに先行するクニース（1821-98）、ヴァーグナー、エンゲル（1821-96）などの諸説の検討を経てである。

有田教授によれば、マイヤは、社会的集団に“悉皆集団観察”をほどこして得られた結果までを含めて社会統計学とする。しかしマイヤの実体科学として統計学は、結果としては膨大な種々雑多な統計の集積に終わった。有田教授は、マイヤの社会的集団が、悉皆集団観察なる方法から規定されたものとして、方法から対象を規定する転倒形態、それから生ずる社会的集団と社会との間隙、さらに方法の共通性によって1個の学問とすることの不毛性をみる。

有田教授は、マイヤに先立ってあるいは並行して、統計学の形式化をリューメリン（1815-89）にみる。リューメリンは、実体科学的

統計学を分解し、「統計方法(方法的集団観察)の使用」と「使用される客体」とに還元し、後者を捨てて前者を取り統計学とした。即ち方法論的統計学=〈形式科学としての統計学〉である。ここでも、方法規定から対象規定が誘導される。対象にたいする方法の独立と優位の構造をリューメリンの所論にみる。有田教授は、リューメリンの統計学は、ドイツ社会統計学の形成確立に大きな影響を与え、その方法的分野に大きな支柱となったと指摘し、前期社会統計学者に入れる。

### 4. チチェックとフランクフルト学派

有田教授は、第1次世界大戦後の20年間に刊行された社会統計学の体系書のなかで、最も注目すべき内容をもつ統計学を提示したのはチチェックであるとする。それが、1922年に公刊された『統計学綱要』である。有田教授は、チチェック統計学の基本構造に深く立ち入り、チチェックが、統計方法とその客体をいかに関係づけたかを分析する。チチェックは、「実体科学としての統計学」に従属していた統計方法論を開放して、統計方法論に統計学を主導する決定的優越的地位を与えた。教授は、チチェックを実質的に方法論者とする。

チチェックは優れた後継者を持った。先ずフラスケムパー（1866-1979）。彼は、1920年代の後半に学界に登場し、師のチチェックとさえ論争を展開した。彼は、“数理的性質は統計学の本質に属する”また“統計学は初歩的部分においても数学である”と、統計的認識が量的認識であることを意識している。そして、アメリカの主として統計的景気観測に用いられた数理統計学の流入を無視出来なかった。数理統計学、特に数理解析をも取り入れる制約条件として、「認識目標の2元論」と「事物論理と数論理の平行論」の2つの原理をたてた。フラスケムパーは大戦末期の1944年に体系的教科書『一般的統計学』を刊行し、彼

の統計的方法論の全貌が示された。彼は、自己の形式的統計学を「社会科学的統計学」と名乗っている。

有田教授は、マイヤ、リューメリンからチチェックを経てフラスケムパーにいたる一連の研究を纏めて、昭和38年10月『社会統計学研究』（ミネルヴァ書房）を刊行され、京都大学から“経済学博士”の学位を授与された。本書は、ドイツ社会統計学研究の最高峰として、有田教授の名を高めた。

第二次大戦後、フラスケムパーを中心としてフランクフルト大学を拠点とし、教授ブリント博士、講師ハルトヴィック博士の3人、さらに彼らに学んだ人たちが、チチェックの形式的科学としての社会統計学の学説を踏襲し、方法論としての社会（科学的）統計学の独自性を主張し、フランクフルト学派と呼ばれている。有田教授は初期のメンゲスもその中に入れている。

この学派、すでに第2次世界大戦前に、フラスケムパーが打ち立てた2つの原理を基準として、社会科学的統計学を主張して、数理統計学と一線を画している。有田教授の研究は、著書の公刊後も、第2次大戦後のフランクフルト学派にまで及び、チチェックには再

三立ち返って、その亡くなる直前まで研究を続けられていた。

### むすび

有田教授のドイツ社会統計学の理論的・歴史的研究は、ドイツ社会統計学研究の金字塔であり、後進への研究指針である。有田教授は、ドイツ社会統計学の統計的集団論の研究に重点をおき、それが類であって現実の社会から乖離しているとする。有田教授は、社会を構成要素に分解し、さらに構成要素を等質化することによって社会の量的規定が可能になるとして、社会を同種の構成要素の並存に編成替えすることによって成立するものを、社会的集団とよばないで、〈統計的集団〉と呼んでいる。この統計的集団も概念的統一体で、現実的結合体である社会とは反対の性格を持つ。しかしこの矛盾は、社会の量的規定のために必然的なものだから、悪しき矛盾ではない。この統計的集団は、認識の対象ではなくて、認識の手段である。よって「統計は集団を語る」ではなく、「統計は社会を語る」と定義すべきであると言うのが有田教授の結論である。

(2004.3.12)